

# 家族サービス

banfree

## 第一章

---

日曜日。親父といつものように10時過ぎてからパチンコ屋へ向かう。  
ただ家にいるだけの男は主婦にとってはただの邪魔な置物より性質が悪いのだ。

言わせてもらえば、男だってたまの休日ぐらいいはゆっくり過ごしたいのだが、  
そうは問屋がおろさない。おかんが掃除機やら洗濯やら家事をうるさくこなすからだ。

そして男一人、家よりはるかにはうるさい駅前のパチンコ屋へ向かう。  
日曜日にパチンコ屋にいる人間の心理なんて、だいたい僕と親父と同じだろう。  
家庭サービスを放棄した男たちで溢れかえっている。

ひとつ言い訳するなら、いい歳したおかんは何をサービスしていいやらわかんないのさ。  
平日は毎日のように昼と晩に教会へ行って勉強やらミサに参加している。  
充実しているじゃないか。多少家事で疲れているとしてもね。

あっちも休日ぐらい一人でゆっくりテレビでも見ながら煎餅をバリバリ食いたいだろう。  
そう勝手に決め付けて僕らは気を利かせている。という事にしておいてくれ。

いつものように、二人で隣同士で座る。  
たいていは海を打ってる。  
魚群が流れてははしゃぎ、外れるとムスっとする。

実際お金を賭けてギャンブルをしているのだから、もっと真剣に画面に見入ってもいいものだが、  
所詮は玉遊び、当たるも八卦、当たらぬも八卦だ。

確率論やらボーダーやらで勝負していない。宝くじと同じだ。  
打たなければ当たらないし、買わなければ当たらない。  
でも、そこからやっと当たるも八卦、当たらぬも八卦になるんだよな。

そんなアトをぼんやり考えながら、タバコを吸い、コーヒーを飲む。  
だいたい二人で横並びで座ると、どちらかが勝つ。というジンクスがあって  
どうやら今日は僕の番らしい。

午前中に5箱。まあまあ成果だ。  
昼飯を干将で食べる。油で床がベタベタしてようが、うまいもんはうまいのだ。  
アアでどうしようか作戦会議だ。  
流して昼から町へ出てショッピングに行ってもよかったのだが、別に欲しいものがないので  
二人で玉を共有しながら、打ち続けることにする。

午後からは打って変わって親父が好調。  
僕は親父が出し切るまで、そんなに打たないアトに決めた。  
ちょっと打っては席を立ち、スロットのシマへ行く。

僕一人ならスロットも打つ。親父が居る時はパチンコオンリーなのだ。  
これが僕の親父への家庭サービスだ。  
パチンコも一人で打つと深みに嵌ったり、孤独だったり、何かと寂しいものなのだ。  
一人だと負けた時に「負けちまったなー（がはは）」と笑って済ませられない。

微妙に気を使ってはいるものの、僕だってそれなりに楽しんでいるし、当たると案外楽しいもんだ。

とは言うものの、午後からは人が増えて少々店内を歩きづらい。  
缶コーヒーを買って戻るか。

どうやら確変は終わったらしく時短中だ。  
7連だったと言われ、途中で2箱飲まれたから、二人で10箱か。  
もう潮時かもしれないな。と親父に告げる。

時間は4時過ぎぐらいだ。  
親父も時計を見て、頷く。  
どうやら今日はこれで帰る事に決まったようだ。  
時短を消化してあっさり台を捨てる。

何事も引き際が大切なのだ。といつも思う。  
今持っている10箱をつぎ込んで10箱以上になる保障はない。

親父を待つ間に、おかんに電話をかける。  
「おしおし、もう帰るけど、何か晩御飯のおかず買ってこようか？」  
「あーそうね、任せるわ」

手抜き癖を息子にまで見せてくるおかんだが、提案した手前、何か晩御飯のおかずを考える。  
わかったことはもうおかんは今日の晩御飯を作る気はないという事だ。  
何か一品や二品ぐらいつけあわせを作ってると思うだろうが、そんなことは一切ない。  
やってくれるのはご飯だけだ。

ちょっと近くのデパ地下に寄って、見てみるしかないな。

そう決めて親父の元へ戻る。  
ちょうど店員を呼んで玉を流しているところだった。  
僕も呼び出しボタンを押して店員を呼ぶ。

おしぼりを渡されて、手を拭き終わるとレシートを渡される。  
それを持ってカウンターへ。  
無駄に愛想が良い姉ちゃんにレシートを渡して暑品を貰う。  
どうやら親父は先に行ったらしい。こういうところがせっかちなんだよな。  
待ってりゃいいのにさ。

暑品を貰って、振り返った時に、若い女、いや若い女の子がいた。  
19歳ぐらいだろうか、パチンコ屋では少し珍しい。

ちょっとガン見してしまっただが、まあいいか。他人だし。  
そう思って出口に向かう。  
店を出た瞬間に後ろから声を掛けられる。

「あの、すみません」

振り返るとさっきの女の子がいた。

「なに？」

「あの、ホテルいきませんか？」

何言ってるんだか、よくわからない。  
いきなりホテルへ誘うナンパなんて聞いたことがない。

「ホテル？なにしに？」

「えっと、その、、行くところがないんです。お金もないし。」

ますます混乱する事を言う初対面の女の子。  
それでもなんとなく言いたい事はわかった。

ようするに、これは援助交際ってやつだな。  
とりあえず暑品を持ったままなので、ついてくるように言う。  
ちょっと離れて後ろからついてくる。

親父の姿が見えた。タバコを吸って待っている。  
さすがの僕も親父の前で堂々とこれから援交するからホテル行ってくるわ。とは言えない。

この子もなんというか、間が無い。  
世の中には親子で休日のパチンコ屋で打ってるやつらも居るんだぜ。

どうしようか思案したものの、晩御飯も買いに行かないといけないし、  
チャンスだろうがなんだろうが、無理なもんは無理なんだよな。

だから、そのままぶっちゃけることにした。

換金所のおばちゃんに暑品を渡す。  
そアで親父にいくらになったか聞いた。  
元から半々のようなものなので、儲けを折半するなんてことはしないが一応。

だいたい二人で8万か。充分だね。  
そアで親父に言う。  
「おかんに電話したら晩御飯作る気ないみたいだから、デパ地下行くべ。  
あーあと、そこの女の子な、行くところないみたい。どうする？」

と、さりげなく会話に混ぜてみた。

吉が聞かえていたみたいで、一瞬ビクッとなる女の子。  
親父がその女の子を見て余計に怯えている。

親父は何も言わないので、僕から言う。  
「まァ行くところもないみたいだし、とりあえずデパ地下は後にしてどっか喫茶店入って話聞こうぜ」

よくわからない提案だった。

別行動してもよかったんだけど、アアは親父がおかんによからぬ事を吹き込む前に一緒に共犯ということにしまおう。

先に家に帰られて、僕はどこへ行ったかとおかんに聞かれて黙っているような気がしない。案外親父は真黙のように見えておしゃべりだからな。

いつも会社から家に帰ってきては、やれ同僚がやれ上司が、と個人情報をべらべら喋ってるし何気にあいつは社内で不倫してるだの、そんな女子社員の噂まで知っているのだ。

そんなわけで、すぐ近くの喫煙者の休憩所、ドトールへ行くことになった。

スタバもあるけど、あんな洒落た店なんかより、タバコが吸えるドトールなのだ。

女の子と二階へあがって先に席を取る。

注文なんてだいたいどれも一緒だ。親父が適当にチョイスするだろう。

我が家だけかもしれないが、そういうところに執着がなく合理的なのだ。

結局払いだって親父になるしな。

空いていたのでテーブルを2つくっつける。

通路側の椅子に彼女はもう肩に掛けていた大きなバッグを置いていた。

どうやら僕ら親子はソファに座ることになったようだ。

そうこうしているうちに親父がトレイを持って階段をあがってくる。

「アっちアっち」と舌をかける。

テーブルにトレイを置いて親父もソファに座る。

なんだか落ち着かない。いつもは対面に座るからか。

そこから彼女の話は始まった。

## 第二章

---

パチンコ屋で若い男に援交を持ちかけたら、なぜかその男の父親とドトールで圧迫面接をされることになってしまった女の子。

僕だって気まずい。なんせ横に親父が居るんだからな。

とりあえず自己紹介をお互いにすることにした。

「僕は佐伯寛、26歳。そして隣に居るのが僕の親父、広見54歳。」

「わたしは、坂本まや。ハタチです。」

よかった。未成年じゃなくて。と、安堵したものの、気まずい沈黙が復活しつつある。

こうなればもう仕方ない。この沈黙に耐えられないのはみんな同じだろう。

どんどん質問を投げかけてみることにしてみる。

「泊まる場所ないの？」

「はい。」

「それで、お金もないと？」

「はい。」

質問のような、確認のような会話だな。

また気まずい沈黙。親父は黙ってコーヒー飲んでるし、どうしたものか。

無反応な親父は放っておいて、質問を続けよう。

「家出なの？」

「家出というか、なんというか。逃げ出したって感じです。」

「だいたいわかったよ。ありがとう。」

僕は相手が聞かれない事は無理矢理聞かない主義だ。

言いたくないのならそれでいい。ベラベラ喋られる方が嫌いだ。

「という、わけみたいだ。親父はどう思う？」

「ん、ああ……」

なんと曖昧な返事だろう。ちゃんと話聞いてたんだらうか。

ちゃんと、おかんにも誤魔化せる策はあるにはあるのだが、

僕としては、親父から提案して欲しかったというか、責任を負いたくないというか。

声をかけられたのは僕だしな。

巻き込まれた親父に責任を負わずのはちょっと気が引けるか。

ああやだやだ。

僕も大人になったもんだ。つい責任を誰かに擦り付けたくなる。

親父の沈黙を好意的に解釈すれば、「お前が決める」ってことなんだろうな。

というわけで、思い切って言うしてみる。

「親父、行くところないだったら、うちに暫く泊めてあげてもいいんじゃないか？」

「……」

「うち一部屋空いてるし、おかんには僕の彼女とでも言えればいいさ」

「……お前がそうしたいならかまわん。」

ほっ。どうやら話はまとまったようだ。

っと、本人の意思を確認してなかったな。

「まやさんはそれでいい？」

「はい、ありがとうございます。よろしくお願いします」

と、ペコッとお辞儀された。

なんだかよくわからない圧迫面接はこれで終わった。

とりあえず、晩御飯を買いにデパ地下へと三人で向かう。

せっかくなので、まやさんの好きなものにしようってことで、聞いたらハンバーグだった。

夕飯にハンバーグを4個とビールを買って三人で歩いて家に帰った。

突然の来客にも、おかんは動揺せず、「あら、いらっしゃい」の一言だった。

図太いというか、抜けてるといふか、あんまり考えないんだよなこの人。

親父は自室に戻って、メールチェックやらパワーポイントで仕事を晩御飯までするようだ。

僕は、おかんへ彼女の簡単な紹介をして、彼女が泊まることを伝える。

途中で「あんた彼女いたっけ？」なんて聞かれたけど、「言ってなかったっけ？」とすっ呆けることにした。

お互いに今日初対面だったけど、なんとか演技して乗り切ったようだ。

どうせ、僕の居ないところで彼女に色々聞いてくるに違いない。

なんとか口裏を合わせておかないとな。

空いている部屋にまやさんを連れて行く。

とりあえず荷物を置いて、状況を軽く説明する。

「ここは元は兄貴が使ってた部屋で、物が多いけど我慢してね。」

「はい。ありがとうございます。」

「あー、あとは、おかんはアレで勘が鋭いのであんまり深く追及してこないけど、だいたいわかってると思っておいてね。」

「えっとそれは、どういうことですか...?」

「つまり、もうバレてると思っていいってこと。だからって怒らないから心配しなくていいよ」  
「素敵なお母様ですね」

「何考えてるかわかんないけどね。  
とりあえず僕はご飯の用意してくるからくつろいでて」

少し強引過ぎたかな、と思いながら自室で部屋着に着替える。

休日のおかんは本当に何もしない。今だってテレビの前で笑点見て笑ってる。  
それは僕と親父がパチンコ打って遊んでいるから悪いんだけど、日曜はお風呂やら洗濯やらも僕がしている。これも立派な家族サービスじゃないんだろうか。いや、親孝行かな？

歳を取るにつれ、息子の使い方が荒くなっているような気がする。  
腰が痛いとか頭が痛いとかなにかと理由をつけて家事を僕にやらせている気がする。  
僕だって仕事で疲れているんだけどな。

そうこうしている間にも、家事をこなさないと晩御飯が食べられない。

にんじんをソテーしたり、ブロッコリーを茹でたり、コンソメスープを作る。  
ハンバーグだけ買ってきたのが間違いだった。  
ハンバーグときゃべつの千切りって合うんだろうか。  
まあいいか、とりあえず出来た。時間は7時前。

テレビではサザエさんをやっている。  
主婦にサザエさん症候群ってあるんだろうか。

と、ぼんやりしてないで、親父に晩御飯ができたと声を掛け、まやさんを呼びに行く。  
ドアをノックすると返事が聞こえ、声をかけて中に入る。

晩御飯中はおかんによる第二回取り調べ大会が開かれるだろう。  
その為の打ち合わせはきちんとしておかないとな。  
とりあえず体裁は整えておかないと、バレた時に言い訳もできない。  
もちろん、ちゃんと話すつもりではいるけど、一日ぐらい息子が彼女を連れて家に着たってやつを  
親に体験させるのもいいかもしれない。

予行練習みたいなもんだ。そう思おう。やっつけの茶番だけど。

さて、どう話を捏造したらいいものか。

遠距離恋愛で、職探しのついでにこっちに来て、ホテル代もかさむから当分の間、うちに泊まってもらうことにした。というのはどうだろう。

ありがちだが、まあいいか。なんとかなるだろう。

事前に話しておかなかったのは、驚かせたかったとかそんな風に言っておけばいいだろう。

そんな打ち合わせをして、いざ食卓へ行くと、テレビはニュースウォッチ7に変えられていて落ち着いた声しか出せない某アナウンサーがニュースを読んでいる、親父とおかんはもう席について僕たちを待っていたようだ。

うちには4つ椅子があるテーブルでいつもは、おかんが僕の横に座るのに、今日はおかんが親父の横に座っている。

気を使われたような、これから圧迫面接が始まるような予感がしてならない。

そして、お茶碗にはもうご飯がつがれていた。

多分親父がついでくれたんだろう。自分だけやけに茶碗にこんもり大盛りについている。がめついな親父。

普段僕は食事中は喋らないし、食べている時に喋るのはマナーが悪いと言われて育ってきた。しかし今日ばかりはいつもの沈黙は通じそうにない。

誰も箸を手に持たない。「いただきます」と僕が試合開始のゴングを鳴らせということか。自らの処刑執行書にサインするような気持ちだ。いざ！

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきまーす」

最後のは親父だな。気楽でいいよな、親父は。

しかし、順番から言えばおかんより先に親父に会ってんだ。そこから始めるか。

と、その前にコンソメスープを一口。おいしい。

なんてしてたら、さっそく先制攻撃がきてしまった。

「あんたたち、今日はパチンコ行ってたんじゃないの？」

ぐっ、さすがに鋭い。容赦ない攻撃ですね、お母様。

「ああ、彼女が来るまで時間潰してたんだよ。午後にこっちに着くって事だったから」

「あらそう。一言ぐらい事前に言っておいてくれたらよかったのに」

「ごめんごめん。忘れてた」  
都合の良い脳みそである。

「すいません、急におしかけてしまったみたいで。」  
と、まだ一口も食わずに出方を伺っていたまやさんのフォローが入る。

「別にいいのよ。言うのを忘れてた寛が悪いんだから。」  
「すいません。」

謝っておこう。平身低頭平身低頭。

いつの間にか親父はもうハンバーグを半分食べて、ごはんをおかわりしに行った。  
さてはサクッとご飯腹一杯食べて逃げる腹積もりだろう。

その後は追及も無かったので黙々と食べる。  
どうやらおかんの気に障るところはクリアしたようだ。  
聞かれていないことは喋らない。  
ただでさえボロが出やすいんだから、これでいい。

無事に食べ終わったら、自室に引き取って知らん顔してればいい。

「そうだ、ビール買ってきてたな。」

いち早く食べ終わった親父が独り言を言う。  
それを聞いたおかんが「あたしにもグラス」と一言。

余計な事を……。  
晩酌が始まってしまった。

いつもはビール呑まないじゃないですか。お酒飲むとすぐ赤くなるのになんでよ。

こうして親父の余計な一言で第二ラウンドのゴングは鳴らされた。

## 第二章

---

時刻は19時半を過ぎて、テレビでは「ダーウィンが来た」が映されている。  
毎回思うのだが、どこにダーウィンが来たんだろうな。喋ってるのはだいたいヒゲじいだし。

って、そんな現実逃避をしている場合ではない。

状況はすこぶる良くない。悪化の一途を辿っている。  
親父とおかん、それに僕までもビールを飲んでいる。  
呑んでいないのはまやさんだけだ。  
おかんからお酒を勧められて、やんわりと「お酒飲めないんです。」と断っていた。  
僕はいつも呑んでいるのに、呑まないと不自然な気がして呑むことにした。

勝手に頼んでもいない第二ラウンドのゴングを鳴らした親父といえは、  
のん気に台所でアテを作っている。  
あれだけ食べたのにな。おかしいな。逃げてるのかな。かな？

僕が思うに、この状況を一番楽しんでいるのが親父で、家に若い女の子がいるだけで  
親父がセクハラをしているようなもので、食事中もチラチラとまやさんを見ていたのを  
僕はしっかり目撃している。

おかんはというと、ちびちびとビールを呑んでいる。  
表情がますます読めない。

「あんたたち、結婚するつもりなの？」とぼつり。

なんでそういうことを小声でぼつりと言うかなあ。  
もっとズバっと思い切って聞いてくれよ、おかん。

「……えーっと、どうだろう？わからない、かな。」  
横目にまやさんを見る。  
「そうですね、まだ早いかなと思ってます。」

「そう。てっきり妊娠してるのかと思ったわ。」

「え！？」  
「ちょっ！」

「だってそうでしょ。いきなり彼女連れてきて、晩御飯一緒に食べて、何かあると思うじゃない  
。先に父さんと一緒だったし。」

「それは早とちりだって！本当にパチンコして、それから迎えに行って晩御飯買って帰ってきただけだから。」

「あら、そうなの？じゃ、ごちそうさま。」

やはりこうなったか。

おかんは、なにやらこの返答に満足したようで、グラスに少し残ったビールを飲み干して、テレビの前のソファへ移動する。

親父はいつの間にか自室に引きこもっていて、アテも自分の分だけだったらしい。一人で晩酌を楽しんでいるみたいだ。なぜだろう、すごいむかつく。

すっかり片付いた食卓。

残った二人でごちそうさまをして、食器を台所へと運ぶ。  
主婦の辛いところである食後の皿洗いが待っている。

「お手伝いします」というので、遠慮なくまやさんに皿洗いを頼むことにした。  
僕はその間に洗濯機から洗濯物を取り出し、親父の部屋からベランダに出る。  
ついでにさっきの第二試合開始のゴングの文句を言ってやる。

「おい、親父。さっきはよくも」

「なんのこっちゃ知らん。うまくやったんだからいいだろう。」

成果主義の中で生きるサラリーマンはこれだから嫌だ。  
過程こそが大事だというのに。

今はちょっとした家庭の危機かもしれないのに、なんでこんなのん気なんだ。  
結託した共犯じゃなかったのか。僕はどうやら下手したらトカゲの尻尾になるかもしれないな。

おかんのでかパンを干しながら、ふと思う。  
そういえば、今日で二度目か……。  
確か、兄貴が結婚するって彼女を連れてきた事があった。

あの時は、事前通達ありで、お茶菓子まで用意してたらしい。  
どうせ近くの文明堂のカステラだろう。

僕は参加していないので知らないが、後に僕の義姉が語ったところによれば、  
駅前まで迎えに来たおかんと一緒に家に向かう途中ですでにノックアウトしたらしい。

詳しい事は知らない。ただノックアウトされたと義姉は言っていた。

さっき僕もノックアウト級のすごいパンチをおかんから食ったしな。  
多分さっきのまやさんにお酒を勧めたのも、妊婦はお酒飲んじゃダメっていう確認のジャブだ。  
それで断ったから、妊娠してるのかと勘繰ったに違いない。

それでも、いきなり彼女を連れてきて出来婚します。は、さすがにないだろうよ、おかんよ。

冷静に分析してみると、やはり末恐ろしいおかんであった。  
そうこうしているうちに手だけは動かしていた僕は洗濯物を干し終わり、親父は風呂へと消え  
まやちゃんは台所でお皿を拭いていた。

「あとやっとくからもういいよ。」と声をかけ、まやさんは兄貴の部屋へと帰っていった。  
早くしないと風呂上りの親父が素っ裸でうろついて、まやさんにセクハラしかねない。

さて、僕も一息つこう。

我が家特有のぶっ飛んだ情報戦を繰り広げた夕食は終わり、  
夜も深くなった頃、僕はまやさんの居る部屋をノックした。

### 第三章

---

実家でコソコソする時はたいていやましい事がある時だ。  
オナニーがやましいか？そんなわけないんだがな、どちらかというといやらしいだし。  
なぜ実家でオナニーするのはこんなにも背徳感を感じるんだろう。

待て、今は抜いている場合ではない。  
別にコソコソする必要も無く、堂々と付き合っている彼女が居る部屋へと赴けばいい。  
付き合っていないけど、建前はそうなのだからいいだろう。断じて夜這いなどではない。

明日はもう月曜日だ。僕は仕事へ行かなければいけない。  
仕事に行っている間に、おかんも出掛けるだろうし、あの子を一人で留守番させられないし  
就職活動という説明もしてあることだし、どこかへ出掛けてもらって時間を潰してもらわないと  
いけない。

トントン

中から返事が返ってくる。  
「どうぞ。」  
「やあ、僕だけど、明日のことを話しておこうと思ってね。」

平日の我が家はほとんど無人に近い。  
午前中はおかんが家事をしている。掃除機をかけたり、  
洗濯物を取り込んだり畳んだり、Yシャツにアイロンかけたり。  
昼前には教会のミサへ出掛ける。夕方に帰ってきて、ご飯食べたりしたらまた出掛ける。

僕ら男二人は8時には家を出る。  
僕の帰宅時間はだいたい遅い。早くても21時を過ぎるだろう。  
しかし、親父は定時帰りだ。さすが年間一人で一億売り上げる男は会社から大事にされている。

そんなことを話してどこか時間を潰せないか言っておいた。  
ここは東京だし、暇を潰すところなら山ほどある。  
そういえば、お金がないと言っていたので、へそくり用のスイカを渡す。  
中には上限の二万円分チャージされて入っている。

電車での移動は、都会人のライフワークだ。  
それにスイカーつで、コンビニや飲食店、自販機までなんでもござれだ。  
便利な世の中っていいよな。

「とりあえずそんなに遅くまで暇を潰さなくていい。  
僕もできるだけ早く帰るから。」

「わかりました。でも、なんでこんなに良くしてくれるんですか？」

「.....さあね。体を売ってまで手に入れるお金と僕の渡したスイカは違うと思うかい？」

「スイカは電子マネーですw」

「うん、そうだね、その通りだw」

「ただ、スイカは暖かいお金です。」

「それがわかってればよろしい。んじゃ、おやすみ。」

やれやれ、僕もくさい台詞を言うようになったもんだ。

寄る年波には勝てないかな。

さっさと歯を磨いてもう寝よう。

翌日、朝6時。いつも通りの起床。

ケトルに水を入れてスイッチを入れる。お湯が沸くまでに洗面所で顔を洗う。

戻ってきたらお湯が沸いているので、親父の分のコーヒーも淹れてやる。

さて、今日はどうだろうか。おかんは朝ごはん作れそうかな？

とりあえずご飯のスイッチを押しておく。これで7時過ぎには炊けるだろう。

昨日、ビールを呑んだおかに朝食の用意をしてくれるだろうという期待は出来ない。

ベーコンエッグにしようか。あと、ピーマンとナスを炒めたやつ。味噌汁はインスタントでいいや。

冷蔵庫の中身を見てそう決めた。

いつもの朝食のメニューだ。

そういえば一回、こんなことがあった。

ある朝、おかんが冷凍庫から海老やらなんかと一緒にオムレツにして作ってくれたが食べ終わった3分後には気分が悪くなってトイレで嘔吐する事件があった。

「あら、ごめんね～」なんて軽く流そうとしていたが、僕は胃の内容物が逆流ってきてそれどころではなかった。

なんでもかんでも生物を冷凍庫に放り込んだら、消費期限が無制限になるわけではないのだ。

あの原因は卵だったかもしれないが、そんな古い卵が入っている冷蔵庫が諸悪の根源なのだ。

と、野菜を切りながら思い出す。今日は四人分作らなければいけないのか。

念の為にもう一品作っておくか。

しかし、鮭の切り身というのも全員分焼くと中途半端に多い。

ここは、まやさん用にフレンチトーストでも作って、別にするか。

ここで気づく。米は何合炊いたんだ？  
いつもなら三合だが、4人居るんだから足りない。  
やはりフレンチトーストにするしかないようだ。

やっと進行が定まったところで、トイレから親父が新聞を持って出てくる。  
「ほれ」と僕に新聞を渡す。ちゃんと手を洗ったんだろうか、いつも不安なんだけど。

「コーヒー淹れといた」

そう言うよりも早く手にコーヒーカップを持って自室へ移動している。  
ほんとせっかちな。

しかし、これも毎朝の事だから気にしない。  
「朝ズバッ！朝ズバッ！」っておしり振って叫びながら戻っていくのも毎朝の事だから気にしない。

我が家の女性陣、と言っても、おかんだけだが、朝は弱い。低血圧だとかなんとか言ってるがそんなに丸々と太っているのに低血圧なものか。高血圧だろう。

朝からうるさいのも我が家の特徴かもしれない。  
そんなわけで材料を下ごしらえをしところで僕も一旦部屋に戻って着替えたりヒゲを剃ったりする。

7時前。いつもなら、すぐに調理に取り掛かるところだけど、今日はまやさんを起こす。

アレだな、有名人寝起きドッキリ!!ってやつだな。  
いや、慎吾ママでもいいかもな。

さりげなく起こしてみよう。  
まずカーテンを開ける。

起きない。

テレビをつけてみる。

起きない。

布団をはが.....すのは服が捲れていたら言い繕えないのでやめておこう。

仕方が無い。普通に声をかけて起こすか。

「おーい、起きろー。」

「んん...はあい」

「もう7時になるから、顔を洗ってリビングにおいで」

「はあああい.....」

ひょっとしたらもう一人、低血圧な女性が増えたかもしれんな。  
ちゃんと起きてくれるだろうか。まあ遅くなってもいいだろう。

リビングのテレビは、おはよう日本を映している。  
そういえば、最近お天気姉さんが、魔女だとかそんなのが話題になってたな。

なんかうめき声が聞こえる。  
トドだってもっと静かに起きると思うが、多分おかんだな。  
もうおかんにかまっている時間の余裕がない。

僕はさっきから超特急で朝ごはん準備中だ。  
もうまやさんは遅れてくると決め付けてフレンチトーストは後回しだ。

ナスとピーマンの炒め物のいいところは、強火である程度火を通してしまえば  
生であろうと、だいたい食えるところになる。  
一品完成。もう一品。あとはもうご飯ついたり、お椀にお湯いれるだけ。

ピピー！

ご飯が炊けた。  
部屋から親父が聞きつけて出てくる。

こういうところがめざとい。耳ざとい？  
そしてこの音で朝ごはんが出来てないと「まだできてねえのか」とちょっと怒る。

たかだか50キロ台の体重の癖にほんと朝からよく食べるのだ。  
そして食べ終わったら、体重計に乗って、55キロを超えただのなんだと騒ぐ。  
体重が増えることがなんか嬉しいらしい。  
おそらく太っているおかんへの当てつけだと僕は思っているが、  
毎朝おかんにスルーされているのによくもこう毎朝日課のようにやるもんだ。

のそっと起きてきたおかんも椅子に座っている。  
各々勝手に「いただきます」と言って食べ始める。

僕はそんなに朝食を食べない。バナナとヨーグルトでいいぐらいだけどそれだと足りない。ソイジョイを一本足せばだいたい昼まで持つ。

僕が朝食を作らないでいいんなら、そうしたいのは山々なんだけどな。実家に帰ってきてからというもの、もうそんな一人暮らしのような朝食を摂っていない。

すっかり佐伯家の朝食担当になってしまった。

食べ終わったのに、起きてこない。少しまずいかもしれない。おかんがぼけーっとしてる間に掛けたほうがいいんだがな。

様子を見に行くとは今度はちゃんと起きてはいたが、ベットの上で女の子座りしてぼけーっとしている。

「お前もか」

おしぼりをレンジで少し温めたのを渡してやる。

過去にこれを寝ている僕の顔にかけて窒息させて僕のことを殺そうとした母親がいる。あれは立派な殺人未遂の事件だった。嫌な事件だったね……。

あまりに起きなかった僕が悪いんだけどね。

さて、残念ながらもう50分を過ぎている。  
「おかんが覚醒する前に家を出るんだぞ。」

そう忠告しておいて、自室に戻って上着を着る。忘れ物が無いかチェックして鞆を持つ。

そしておかんからリモコンを奪い取って僕はMOCO'sキッチンを見るのだ。親父もほぼ同じタイミングで部屋から出てきて、一緒にMOCO'sキッチンを見る。

地味に会社で流行っているのだ。

おっさんたちは、もこみちが寒いギャグを言うのを期待しているし女子社員はもこみちのイケメン顔を見てニヤニヤしているそう。若い男性社員の多くは、自炊に凝っている奴が嵌ってる。

僕はオリーブオイルどぼどぼ！塩こしょうファサー！だけ見ればそれでいい。

「なんだ今日は豚の角煮か」

「俺、今日、お昼はチャーシュー麺にしよーっと」

さいですか。玄関から「行ってきます！」と言って今日も一日が始まる。  
もちろん返事はない。